

# 天華百劍 仁王の子孫

龍鳴

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

光があれば闇がある陽があれば陰がある……

かつて仁王と呼ばれる蒼き眼の侍がいた……

その侍は数多の妖を殺しそして日ノ本……ジパングを救った……

そして蒼き眼の侍は歴史から姿を消し侍の事を知っている者はいなくなりつつ……

その蒼き眼の侍はこう呼ばれていた……『仁王』と……

それから幾多の時が過ぎ時は平成新たな敵『禍憑き（まがつき）』が出現した。

それに対抗するのはうら若き少女であり刀でもある『巫剣（みつるぎ）』

そして巫剣達と共に日ノ本を護るべくかつて日ノ本を救った英雄達が立ち上がった

！その内の一人『桜井荊軻（さくらいけいか）』はこう呼ばれていた……

仁王の子孫と……

これは仁王の子孫である少年と少女の姿をした刀巫剣達の物語である……

「闇を切り裂きいざ、咲き誇らん！」

注意事項！

この小説は作者の完全自己満足小説です。そのため駄文です。

作者は仁王を動画でしか見たことが無いです。

作者は豆腐メンタルです。

以下の事が気に入らなかつたら即座にブラウザバックてください。

# 目次

プロローグ 仁王伝説	1
壱ノ剣 出逢い	7

## プロローグ 仁王伝説

かつて一人の蒼き眼の侍がいた。

その侍は自分の大切なものを取り戻すために黄金の國『ジパング』にやって来た。

そして数多の妖と戦い大いなる野望を打ち砕いた。

その侍は歴史から隠蔽され姿を消した。

その侍はこう呼ばれていた……『仁王』と……

とある山の最深部其処には一軒の小屋が建てられていた。その小屋から一人の少年が出てきた。

「うくん！今日も良い天気だ！」

整った顔立ちに流れるような銀の短髪そして特徴的なのは蒼の瞳まるで異国の人間の様な少年がいた。因みに彼はこんな容姿だがれつきとした日本人である。

少年は空を見て笑顔でこう言った。

「今日は良い天気だから畑の作物の確認と薪割りかな！」

『その前に朝飯だぞ？ 荊軻？』

何処からともなくまるで威厳のある声がする。その声は荊軻と呼ばれた少年の首に

かけている橙色の結晶から声がした。

「分かっているよ。黒龍。けどその前に体を動かさないと！」

『我は早く朝飯を食いたいのだから……』

「大丈夫だつて！少し体を動かしてそれから朝御飯を食べる！その方が朝御飯が美味しく感じるじゃないか！」

『はあ……まあ、良い。さつさと薪割りをしろ。こつちは早く朝飯が食いたい』

声……『黒龍』は少年に呆れながらそう言った。

「さてと薪割りをして早く朝御飯を食べようか！」

少年……『桜井荊軻』は薪割り用の斧を持ちそして薪割り用の木を切りるのであった……。

荊軻が薪割りをしているその頃某所には二人の男性がいた。

「家忠殿いえただそれは本当でございますか？」

「ああ、本当だ。まさか妖騒あやさわぎが終わって二年まさかこのようなことになるとは……」

一人は荊軻しんかと同じ年位の少年でもう一人は40〜50歳ぐらいの男性である。

「本当にかつて日ノ本を脅おそかした物の怪『禍憑まがつき』が目撃されたのですか？」

「ああ、御華見衆おはなみしゆうからそう聞いている」

「それではどうすれば！我々に出来ることは……」

「それを今君に言おうとしている」

「本来ならば協力者である駆紋君くもんがいれば心強いのだが……彼は現在行方不明……」

我々も彼の事を探しているのだが某国のホテルでチェックインしたのを最後に行方知れずだ……」

二人の男性はかつて日ノ本で起きた事件の協力者を思い出す。

破天荒なジャーナリストで妖騒あやさわぎに首を突っ込み男性達に幾つもの有力な情報を渡したジャーナリスト『駆紋紘汰くもんこうた』の事である。それもそのはずだ。彼は今異世界のハルゲニアと呼ばれる大陸において使い魔生活をしているのだから……」

「それでは彼に協力を？」

「ああ、そうするしかない」

「彼は今どこに？」



「山で暮らしながら学校生活をしています」

「そうですか…… この事は彼には？」

「言おうと思う。この騒動を解決できるのは彼…… 荊軻君を含む君達と巫剣達みづるぎだけだ」

「その任は私にお任せください。この服部森羅にお任せを！」

「分かった。だが……」

「だが？」

「確か荊軻君は女性にめっぼう弱かった気がするのだが……」

「確かそうでしたね。荊軻は女性に触られるだけで顔を赤くし女性とは全く話せない女性の服の露出が高ければ即座に気絶する…… そんな男でしたね」

森羅と呼ばれた少年は家忠と呼ばれた男性の疑問に答える。

「彼には少し…… いや、かなり荷が重いかもしれない……」

「それはどういう……」

少年の疑問に答えようと男性の口が開く。

「巫剣は少女であり刀でもあるんだ」

「…… は？」

少年は男性の言った言葉に呆気をとられる。

「すみません。家忠殿失礼を承知なのですがもう一回巫剣について教えてください」

「ん？聞こえなかったのかい？ではもう一度言うぞ」

「巫剣は少女であり刀でもあるんだ」

「はあああああッ!?!」

「うお!?!どうしたんだい!?!」

某所一人の少年……『服部森羅』の驚愕に満ちた叫び声が聞こえその叫び声に驚く

男性……『徳川家忠』の姿があつた……。

一方その頃荊軻達はと言うと……

「いっただつきまーす!うーん!美味しい!我ながら上手く出来てるよ!」

『荊軻!その赤鮭を食ってくれ!あの塩味が堪らん!』

「うんうん!だけどご飯と一緒にね?」

そんなこと露知らず呑気に朝食を取っていた。

## 壺ノ劍 出逢い

日常それは本当にかげがえのない物だと知ったのは二年前の出来事妖騒動で知った。やつと日常に戻って薪割りをしたり山に流れている川に釣りをしに行ったり…。やっぱり日常は良いなって思ってたんだ。

けど今の俺は…

「ちよつと！離しなさいよ！」

「駄目だよ！ここで離したら君戦うでしょ！」

女の子の手を引つ張り後ろから追いかけてくる化け物から逃げていた。  
どうしてこうなった！

あの後俺は朝御飯を食べた後学生服に着替えて自分の通っている高校に行った。と言つても悪魔がしきつっている学校じゃなく不良がヤバイほどいる学校でもなくごくごく普通の男子校に俺は通っているんだよね。

自己紹介が遅れたね？俺は桜井荊軻日本人だ。良く容姿で外国人に間違えられるけどこう見えてもれっきとした日本人だ。

「しっかし良い天気だねえ。こんなに良い天気なら日向ぼっこでもしたいよ」  
『お前は老後の老人か！』

「え？でもこんなに良い天気なんだよ？日向ぼっこしたら気持ちいいじゃん」  
『全く何でこんな変人に我は宿つたんだ…』

そう俺は相棒の黒龍にそう告げるのであった。

黒龍…それはかつて日ノ本を喰らおうとした災厄の龍。訳有って俺は黒龍をその

身に宿しているんだ。と言っても宿っているのは俺の体じゃなくてご先祖様の残した首飾りに宿っているだけだね？まあ、最初はいがみ合っていたけど時が経つにつれて黒龍と俺は相棒と呼び合える中になったんだよな……。

けど黒龍？それ作者の処女作の主人公にも言えたことじゃないよ？だって趣味が散歩と読書って完全にお爺ちゃんじゃん。

某所

「さてと散歩にでも行くか……」

「やつほー！かみやん！どこ行くの？」

「ん？ああ、今日は良い天気だから散歩にな？」

「えーかみやんなんかジジくさーい」

「言うな。自分でも自覚してるから……」

なんだろう？どこかから電波が届いたんだけど……ま！いつか！  
そう思い俺は高校に行くのであった。

学校が終わって放課後俺はそのまま家に帰ろうとしていた。それは今から夜ご飯の下ごしらえをしないといけないからだ。

「きゃー！」

「あーごめん！大丈夫？」

今日のご飯を何にしようか迷っていると誰かにぶつかってしまった。

俺はそのぶつかった人に手を差し出した。そのときにぶつかった人の正体があった。た。

「あ、ありがと……」

それは女の子だった。赤色を少し濃くした感じの髪をツインテールだっけ？それで纏めた美少女だった。

「良かった！怪我はない？」

「ええ、無いわ」

「良かった〜」

少女は差し出した手を握りその場に立つ。

（おい、荊軻）

（なんだよ？黒龍？）

（この子娘……）

黒龍がなにか言おうとしたそのとき。

「ギシヤアアアツ!!」

なにか身の毛のよだつ叫び声が聞こえる。

「な、なんだ!?!」

俺は叫び声が見た方を見る。其処には化け物がいた。仮面のようなものを被り何かの液体が固まったような体その化け物の手にははこぼれがした刀が握られていた。そんな化け物がかかなりの数いた。

「まさか禍憑が!」

「禍憑?」

俺は少女の言葉に疑問を持つ。

禍憑ってなんだ?まさか新手の妖か!

(荊軻……あの化け物……荒魂あらたまの気配がする)

(まさか本当に新手の妖か!?)

(分からんだが、あの小娘はあれの事を禍憑と呼んでいた……それにあの小娘から仁魂にきたまの気配がする……)

(仁魂だつて!?!それは守護霊にしかしないはずじゃ!)

「危ない!」

少女が声を荒げる。

「へ？」

俺は前を見る。すると禍憑と呼ばれた化け物が俺に向かって刀を降り下ろしていた。不味い！油断していた！そう思い俺は目をつぶる。

「はあっ！」

ガキンツッ！そんな鉄と鉄がぶつかる。俺は目を開けると其処には刀を持った少女がそこにいた。

「くうう……」

少女の服装はまるで侍の鎧を少女っぽくした感じの姿に変わっていた。その少女の手には刀が握られておりその刀で化け物が降り下ろした刀を受け止めていた。

「貴方早く逃げなさい！」

「いや！でもこの数一人で戦うつもりなの！」

「良いから逃げなさい！禍憑は私達巫剣しか倒せないから民間人は早く逃げなさい！」  
そう少女は俺に言い禍憑と呼ばれた化け物に刀で攻撃する。

（助けるんだろ？ 荊軻？）

（そうしたいけど！あれは家に置いてきたし對抗する手段がないよ！）

（そうお前が悩んでいるうちに小娘は死ぬぞ？）



「きゃー！」

少女は化け物の攻撃を食らったようだ。

「…… 悩んでも仕方無い！」

俺はすぐさま少女に駆け寄り少女の手を握りその場から逃げる。

「ちよつと!? 貴方なにを!?!」

「この数は流石にヤバイからここから逃げよう！」

「はあ!? 貴方なに言ってる!」

「文句は後で受け付けるから！」

俺は少女の手を引っ張りその場から逃げる。禍憑と呼ばれた化け物は俺達を追いかけてくる。

それが冒頭の出来事に繋がるんだ……

「はあはあ! ここまで来れば安心だよ……」

「……」

俺達は今廃工場に隠れている。どうやら化け物も俺達を追ってこの廃工場に入って俺達を探しているようだ。

「何で逃げたのよ……」

「え？」

「何で逃げたのよ！貴方下手したら死んでたのよ！禍憑は巫剣しか倒せないのよ！」

「え？でも……」

「言い訳は良いの！はあ…… 何で人探しの途中で禍憑が出てくるのよ……」

まさか桑名江の不幸体質が移ったのかしら？そう少女は呟いた。

桑名江って誰？俺はそう思った。これからどうしようかそう考えてると……

『ピピピッ！』

「あ、電話だ」

俺の携帯電話から着信音が鳴り響く。ちょ！今化け物から隠れているから黙ってよ！俺はそう悪態をつき電話をしてきた人物に文句を言おうと電話に出る。

「もしもし？」

『荊軻か！』

「森羅?! 一体どうしたの？」

電話の主は俺の親友であり戦友でもある忍者服部森羅である。何で連絡を？最近会

えなかつたから嬉しいけど……

『今お前はどこにいる!』

「どこつて廃工場だよ。つて?それよりも今大変なんだから!」

『大変?どういうことだ?』

「学校の帰りに女の子とぶつかつてそしたら急に化け物が襲いきつてきてそれで今その女の子と廃工場に隠れているんだ!」

『なに?それは本当か?』

「本当だよ!禍憑だとか巫剣だとか訳が分からないよ!」

『なに!?!禍憑と巫剣だ?!』

「え?知ってるの?」

『今から俺はその事をお前に言おうとしていたのにもう接触したのか!』  
「え?」

『良いか!良く聞k『少し借りるぞ?』あ!小烏丸殿!』

突如森羅の声が途切れ少女の声が聞こえる。

「誰ですか……」

『そう警戒するでない。妾は敵ではない』

「何で森羅と一緒にいるのですか。答えてください!」

『そうカツカするでない。いま城和泉は近くにおるな?』

「城和泉? 誰ですか」

『お主がぶつかつた少女じゃ』

「その女の子ならいますけど?」

『それならば城和泉に電話を変わつてくれんかのお?』

「……それは出来ません」

『なぜじゃ?』

「だって……完全に囲まれましたから……」

俺達を囲む化け物の姿があつた……